

序文

本書は第3巻と題されているが、それ自体として読むことができる。索引の冒頭は、読者が一層少ない部分しか読まずにすむ方法を説明している。

私はピーター・シンガーにとっても感謝している。彼がいなかったら私は第3巻のいかなる部分も書かなかっただろう。シンガーは何人かのもっともすぐれた哲学者たちに、本書の姉妹編である『何か本当に重要なことがあるのか?』に収録された論文を書くよう説得した。私はこれらの論文の著者たちに、返答を書くのにこれほど長い時間がかかったことをお詫びする。これらの論文は私がいくつかの大間違いをしていたことを示して、私に新しい考えを持つようにさせてくれた。

私はまた、彼らのうちの二人、アラン・ギバードとピーター・レイルトンが、それぞれ独立に、われわれの間のメタ倫理学上の主要な意見の相違の少なくともいくつかを解消できる方法を示唆してくれたことに興奮を感じた。私はこれらの示唆を第三十八、三十九、四十、四十二、四十六、四十七章で擁護した。これらの章に含まれている彼ら二人のコメントの中で、レイルトンはわれわれの意見の相違は完全に解消されたと同意し、ギバードはわれわれの意見の相違は部分的に解消されたと同意する。私は自分と同じくらい物事を正しく見ていると思われる人々と意見を異にすること深く心を乱される。それが理由で、私はレイルトンとギバードと私が今や同じような信念を持っていることを、レイルトンと同様「極めて喜ばしい」と感ずる。

シンガーは私が本書の残りの部分を書くきっかけになった評言も行った。彼は私が第1巻と第2巻の中で、〈行為帰結主義〉とシジウィックが〈常識道徳〉と呼んだものとの間の意見の不一致についてほとんど何も書いていないということに、失望の念を礼儀正しく表明したのだ。本書の第X部における私の目的の一つは、これらの不一致のいくつかは解消できると示すことである。私が前に書いたように、「〔非宗教的倫理学〕はごく初期の段階にある。……われわれがすべて意

見の一致に到達するかどうか、われわれにはまだ予言できない。われわれは〈倫理学〉が将来どのように発展するかを知らないから、高い望みを持つことは不合理ではないのである。「理由と人格」本文末尾」。

私はまた多くの他の人々に助けられた。私が最も多くを助けられたのは、セリム・バーカー、ルース・チャン、フランセス・カム、ジェフ・マクマハン、イングマル・ペルソン、ティム・スキヤンロン、シャロン・ストリート、ラリー・テムキンによってである。私はロバート・オーデイ、ジョン・ブルーム、ニコラス・ボストロム、ロジャー・クリスプ、ギヤレット・カリテイ、ジョンサン・ダンシー、デイヴィド・イノック、ウイリアム・フィッツパトリック、トマス・ハーカ、トマス・ネーゲル、マイケル・オーツカ、サミュエル・シェフラー、クヌート・スカールソンによって多くを助けられた。私を助けてくれた他の人々は、マルセロ・アントツシユ、ベンジャミン・バトラー、デイヴィド・コップ、アンドルー・フォースハイムズ、ダニエル・フォーマン、ジェイムズ・グッドリッチ、アビル・アーメド・ハク、アンドルー・ハリス、クリストファー・ハウザー、ハサン・ディルジェル、フランク・ジャクソン、アーロン・ジャスラヴ、ガイ・カヘイン、ジャスティン・カレフ、ジョゼフ・カースティン、ダ

グラス・タレム、アントン・マーコク、ダニエル・ムノス、ジェイク・ネベル、マーティン・オネイル、トビー・オード、ジェイコブ・ロス、リチャード・ローランド、ブルース・ラッセル、バート・シュルツ、キーラン・セティヤ、ジョン・スコラブスキー、ソール・スミランスキー、シグルン・スヴァヴァルズドットテイル、ヴィクター・タドロス、フィオナ・ウッドランド、アレックス・ウオースニップ、フランク・ウーである。また私が名前を書かなかつたか見つけられなかつた人々が他に何人もいることを私は確信している。

ピーター・モントチロフには今度もまた多くの賢明な助言をいただいたことに大変感謝する。

重要なことについて

第3巻

目次

第VII部 還元不可能に規範的な真理

第三十七章 物事はいかにして重要でありうるのか…………… 41

128 気にかけることと、気にかけるべき理由を持つこと…………… 41

129 哲学的な意見の不一致…………… 51

第三十八章 非実在論的認知主義…………… 57

130 メタ倫理学…………… 57

131 存在論…………… 60

第三十九章 規範的真理と自然的真理…………… 67

132 概念と性質…………… 67

133 同一外延の議論…………… 73

134 規範性の反論…………… 74

	135	科学のアナロジ	77
	136	瑣末性の反論	88
第四十章		ギバードの非自然主義者への申し出（オファー）	91
137		単一性質の幻想	91
138		事態の自然主義的状态と規範的真理	92
第四十一章		レイルトンのソフトな自然主義擁護論	97
139		複数の性質の同一性	97
140		瑣末性の反論に対するレイルトンの第一の返答	102
第四十二章		レイルトンによるわれわれの意見の不一致の解消	107
141		レイルトンの一層広い見解	107
142		レイルトンの一層広い見解がなしとげたこと	110
143		レイルトンのコメント	122
第四十三章		ジャクソンの非経験的な規範的真理	139
144		ジャクソンの同一外延の議論	139
145		ジャクソンの形而上学的想定	144

第四十四章	シュローダーの保守的な還元テーゼ……………	149
146	瑣末性の反論へのシュローダーの批判……………	149
147	シュローダーと私はいかにしてわれわれの意見の不一致を解消できるか……………	157
148	私はどのようにラッセルを誤って導いたか……………	174
第Ⅷ部 表出主義的真理		
第四十五章	準實在論的表出主義……………	181
149	欲求と態度と信念……………	181
150	道徳的真理を語る権利を得る……………	193
第四十六章	ギバードによるわれわれの意見の不一致の解消……………	201
151	ギバードの収斂の主張……………	201
152	事物が重要かどうかは重要か？……………	204
153	物事を正しくとらえる……………	211
154	ギバードの形而上学的疑念……………	218
第四十七章	もう一つの三重理論……………	227
155	ギバードのコメンタリー……………	227

156	ハッピー・エンディング	247
-----	-------------	-----

第Ⅸ部 規範的理由と心理的理由

第四十八章	表出主義的理由……………	265
-------	--------------	-----

157	ブラックバーンの困惑	265
-----	------------	-----

158	理由に関するブラックバーンの信念	269
-----	------------------	-----

第四十九章	主観主義的理由……………	277
-------	--------------	-----

159	スミスによる主観主義の擁護	277
-----	---------------	-----

160	ストリートによる主観主義の擁護	282
-----	-----------------	-----

第五十章	ストリートのメタ倫理学的構成主義……………	291
------	-----------------------	-----

161	ストリートの暴露論法	291
-----	------------	-----

162	ストリートの相対主義	295
-----	------------	-----

163	ストリートの見解の規範的含意	308
-----	----------------	-----

164	ストリートに関するチャペルの主張	314
-----	------------------	-----

第五十一章 道德と非難と内的理由……………321

165 内的理由に関するダーウオルの主張……………321

166 ダーウオルによる道德内在主義の擁護……………331

第五十二章 ニーチエの山……………343

167 ニーチエと収斂の主張……………343

第X部 倫理

第五十三章 重要なことと普遍的理由……………349

168 誰か―すべての人のテーゼ……………349

169 重要なことに関する普遍主義……………365

第五十四章 衝突する諸理由……………371

170 シジウィックの問題……………371

171 道德的理由と自己利益的理由……………374

172 他の諸問題……………378

第五十五章 正と善……………387

173 道德的兩価性……………387

174	不正行為の悪性	392
175	道徳的理由と不偏的理由	396
176	不正行為と理由	405
第五十六章 義務論的諸原理………		
177	手段原理	409
178	人を害することと害悪から救うこと	423
第五十七章 行為帰結主義と常識道徳………		
179	人々を取り扱う善い方法と悪い方法	437
180	義務論的悪性と非義務論的悪性	442
181	人格的義務とシエアされる義務	449
第五十八章 統一理論に向けて………		
182	行為帰結主義	457
183	規則帰結主義と動機帰結主義	461
184	最善化的な動機と規則	463
185	小さな影響と大きな害悪	467
186	結論を与えない諸結論	478

卷末注	485
出典に関する注	
訳者解説	511
参考文献	7
索引	2
	499

第1巻目次

序論 サミュエル・シェフラー
序文
要約

I 理由

- 第一章 規範的概念
- 第二章 客観主義理論
- 第三章 主観主義理論
- 第四章 さらなる議論
- 第五章 合理性
- 第六章 道徳
- 第七章 道徳的概念
- II 原理
- 第八章 可能な合意

第九章 単に手段として
第十章 尊敬と価値
第十一章 自由意志と功績

III 理論

- 第十二章 普遍的法則
- 第十三章 誰もがそうしたらどうなる？
- 第十四章 不偏性
- 第十五章 契約主義
- 第十六章 帰結主義
- 第十七章 結論
- 補論ABC
- 卷末注／出典に関する注
- 参考文献／索引

第2巻目次

序文・要約

IV コメントラリー

連山のハイキング スーザン・ウルフ

目的それ自体としての人間性

アレン・ウッド (訳・奥野久美恵)

方法の不適合

バーバラ・ハーマン (訳・奥野久美恵)

どうして私はカント主義者ではないのか

T・M・スキャンロン

V 回答

第十八章 連山のハイキングについて

第十九章 目的それ自体としての人間性について

第二十章 方法の不適合について

第二十一章 人数はどのようにして重要なのか

第二十二章 スキャンロンの契約主義

第二十三章 三重理論

VI 規範性

第二十四章 分析的自然主義と主観主義

第二十五章 非分析的自然主義

第二十六章 瑣末性の反論

第二十七章 自然主義とニヒリズム

第二十八章 非認知主義と準實在論

第二十九章 規範性と真理

第三十章 規範的真理

第三十一章 形而上学

第三十二章 認識論

第三十三章 理性主義

第三十四章 意見の一致

第三十五章 ニーチェ

第三十六章 最も重要なこと

補論DEFGHIJ

巻末注／出典に関する注

訳者解説

参考文献／索引

ピーター・シンガー編著『何か本当に重要なことがあるのか?』目次

序文・謝辞 ピーター・シンガー

第1章 パーフィットの一生は無駄だったか?——OWM第VI部に関する考察 ラリー・S・テムキン

第2章 メタ倫理学の山の二つの面? ピーター・レイルトン

第3章 パーフィットの規範的概念と意見の不一致 アラン・ギバード

第4章 オール・ソウルズの夜 サイモン・ブラックバーン

第5章 パーフィットの誤ったメタ倫理学 マイケル・スミス

第6章 「本当に」重要なことは何もない、しかしそれは重要なことでない

シャロン・ストリート

第7章 重要なことを知る リチャード・Y・チャペル

第8章 ニーチェと規範的収斂の希望 アンドルー・ハドルストン

第9章 倫理学における還元主義を擁護する フランク・ジャクソン

第10章 メタ倫理学のどこが重要なのか? マーク・シュローダー

第11章 道徳的直観主義の擁護 ブルース・ラッセル

第12章 道徳と非難と内的理由 スティーヴン・ダーウォール

第13章 客観性と「倫理学の最も深い問題」に関するパーフィットの見解

カタジナ・デ・ラザリニラデク／ピーター・シンガー

訳者解説／索引

訳者解説

によることにする。

本書は Derek Parfit, *On What Matters*, Volume Three (Oxford University Press, 2017) の全訳である。

著者パーフィットが「序文」で書いているように、本書はピーター・シンガー編『何か本当に重要なことがあるのか?』に収録された、『重要なことについて 第1巻・第2巻』に関する十三篇の論文に対する返答をまとめると同時に、パーフィットが提唱する帰結主義倫理のさらなる展開を行った書物である。なお本書四八二頁で予告された『重要なことについて 第4巻』はパーフィットの逝去のため書かれないままに終わった。以下の解説では『重要なことについて』を「OWM」と呼び、頁数を示す必要がある場合は訳書の頁数によることにする。

本書の構成は大きかには、第VII部から第IX部が、OWM第1巻第I部と第2巻第VI部のメタ倫理学的議論を補足しているのに対して、第X部は行為帰結主義と常識道徳の周到な検討などによってOWM第1巻第III部およびパーフィットの前著『理由と人格』(一九八四年。邦訳は勁草書房、一九八八年)第I部の帰結主義的規範倫理を補足していると言えよう(ただしパーフィット自身は、OWM第I部の理由に関する客観主義と主観主義の対立は、OWM第VI部のメタ倫理学的な実在論/実在論の区別とは異なる実質的な規範的問題と考えているようだ。本書160節後半、特に二八九―九〇頁を見よ)。第X部については以下で触れないので一言だけ述べると、その中で一番成功しているのは、「ダブル・エフェクトの原理」とも呼ばれる、義務論者がしばしば訴えかける(手段と副次的効果の原理)に対する根本的批判(17節)だと思う。(ただし注意すべきことだが、パーフィットがそこで言う「一人の人を殺すこと」で他の何人かの命を救うことは不正である」という(危害原理)は、J・S・ミルが『自由論』で提唱したと解される反パターナリズムの〈危害原理〉と名前は同じでも別物である。)

以上で述べた事情から、本書は『何か本当に重要なことがあるのか?』と併読することが望ましいし、後者の読者も本書を併読することが有益だろう。この二冊の原書はパーフィ

ットが二〇一七年一月二日に死去した直後、その一月中に刊行されたが、訳書もそれにあわせて同時に刊行することにした次第である。

ここで『何か本場に重要なことがあるのか?』の諸論文を振り返ってみる。OWM第2巻第三十五章「ニーチェ」のニーチェ解釈を問題とするハドルストンの論文を除く十二篇が取り上げるテーマはしばしば重なっているの、それらのテーマのうち中心的なものとしてそれに言及する論者を列挙すると次のようになる。

- 「重要である」とはいかなることか　テムキン、ギバード、ストリート
- 「理由」の概念(特にウィリアムズ解釈との関係で)　テムキン、スミス、ストリート、ダウウォル
- 瑣末性の反論　レイルトン、ギバード、ジャクソン、シユローダー、ラッセル
- 表出主義　ギバード、ブラックバーン
- 進化論的暴露論法　ストリート、チャペル、ラザリール、デクとシンガー
- 意見の不一致　チャペル、ジャクソン、ラッセル

パーフィットは本書で彼らの議論のすべてに逐一応答しているわけではないが、いずれのテーマについても何らかの仕方では触れている。どの節でどのテーマに触れているかは本書冒頭の「要約」と巻末の索引が手引きになる。多くの場合、パーフィットは基本的な主張は譲らないが、いくつかの論点については自分が論者の主張を誤解していた(たとえばギバードの表出主義について)とか、自分の書き方がミスリーディングだった(たとえば瑣末性の反論の表現方法について)と率直に認めている。パーフィットの応答がどの程度成功しているかは読者自身で判断していただきたいが、素朴な感想を言えば、私はパーフィットの主張の多くに賛成できる一方で、「重要である」に関するテムキン論文4節とストリート論文8節、瑣末性の反論に関するジャクソン論文5節とラッセル論文4節の批判的なコメントには説得力を感じ、パーフィットがあまり満足すべき応答を行っていないように思った。

なお進化論的暴露論法について付言すると、これらの論文でもOWMでも十分明確には述べられていないが、それは規範倫理学上の主張とメタ倫理学上の主張に分けることができる。前者の主張は(義務論的な信念は人間の進化の産物として生じたが、不偏的な帰結主義はそうでないから、帰結主義の妥当性が裏付けられる)というもので、「ローカルな進化論的暴露論法」と呼ぶことができ、後者の主張は(道徳的な